浦島太郎

むかしむかし、浦島太郎という若い漁師が、年老いた母親と暮らしていました。ある日、海辺を歩いていると、子どもたちが一ぴきのかめをつついたり、ひっくり返したりして遊んでいました。浦島太郎は、「これこれ、かわいそうだから、にがしておやり」と言い、かめを助け、海にはなしてやりました。

しばらくたったある日のこと。浦島太郎がつりをしていると、かめが一ぴき泳いできて、言いました。「このあいだはありがとうございました。お礼にあなたを竜宮城へおつれします。」浦島太郎はよろこんで、かめの

せなかに乗ると、かめは海の中を泳いで行きました。

気がつくと、まばゆく光るごてんがみえてきました。浦島太郎がかめからおりると、美しい乙姫様が、たくさんの魚をしたがえてあらわれました。「ようこそおいでくださいました。どうぞすきなだけいてくださいね。」竜宮城の広間では、次から次へとごちそうが運ばれ、魚たちが美しい舞をみせてくれます。まるで夢を見ているようで、毎日うっとりとくらしていましたが、三年たつと、母親のことが心配になり、帰ることにしました。乙姫様は、おみやげに美しい箱を出して「これは玉手箱です。でも、絶対にあけてはいけませんよ。」と言い

ました。浦島太郎は玉手箱をかかえ、かめのせなかに乗ると、いつの間にか海辺に戻っていました。

浦島太郎は急いで家に帰ろうとしましたが、どうも村のようすが違います。自分の家もみつかりません。そこで、人にたずねてみました。「浦島太郎？そんな名前の人が百年も前におったが、ある日海へ漁に出たまま帰らなかった、と聞いたことがある。」浦島太郎は、口もきけないほどおどろきました。竜宮城の三年間が、地上では百年だったのです。浦島太郎は悲しみながら海辺へ戻り、すわりこんでしまいました。

そして、玉手箱のことを思い出し、乙

姫様に言われたことを忘れて、少し開けてみました。そのとたん…。箱の中からまっ白いけむりが立ち上り、浦島太郎はみるみる髪がまっ白になり、しわだらけでこしの曲がった、よぼよぼのおじいさんになってしまったということです。